



## 水稻種子の取り扱い注意点について

### 「安定した消毒効果を得るためには」

#### ●保管上の留意点

- ①紙袋であっても雑菌の感染防止のため、直接地面におくことは避けてください。
- ②病原菌との接触を避けるため、稲わら・もみ殻・ムシロ・土など直接接触れないよう保管願います。
- ③湿気が多い所を避けできるだけ清潔な場所に保管してください。
- ④ネズミ等の被害防止を徹底してください。

#### ●消毒・浸種・催芽のポイント

- ①薬剤消毒を行う場合については、防除効果の安定をはかるため薬液の温度は10℃～15℃を確保してください(温度が低いと効果が劣ります)。

※塗沫法および湿粉衣法で消毒した種子は、種子表面に付着した薬剤が浸種後水に溶けだし、種子周囲の薬剤濃度が高まった状態で消毒効果が発揮されますので、浸種開始後2日間は種子袋をゆすったり、水のかけ流し、循環や交換をしないでください。

- ②浸種については積算温度100℃を目安に、水温10℃～15℃が確保できる4月から開始するようにお願いいたします。(10℃以下で浸種した場合休眠性が逆に深まる場合がありますのでご注意願います。又、水温が10℃を下回ると種子消毒の効果がうすれ、ばか苗病等の病害発生要因になりますので、適正な管理をお願いします。)

最初の2日間は水を交換せず、その後1日おきに水を交換して酸素供給を促しましょう。

※田植予定日から逆算して播種作業、浸種作業を行うことが重要となります。

- ③催芽について、温度は30～32℃でお願いします。年により休眠性に差があるため発芽速度が異なりますので芽の伸ばしすぎには注意願います。

※温湯消毒済み種子と薬剤消毒種子等、消毒方法の異なる種子を同じ容器で浸種すると消毒効果が低下し病害の発生原因になりますので行なわないでください。また、複数品種の同時浸種も行わないようお願いいたします。

※種子ネットに入っているユボ紙(温湯消毒済カード)は、浸種に入ってもさしつかえありません。但し播種前には取り除いて保管してください。